書　評・紹　介

W. Penn Handwerker (ed.)

Births and Power : Social Change and the Politics of Reproduction

Westview Press, Boulder, San Francisco, & London, 1990, 227pp.

社会学の歴史において人口問題は，Durkheim 学派にみられるように，少なからず重要な研究テーマとしてその伝統的遺産を提供してきたが，近年，そこに新たな意味あいが加えられつつあるようにみえる．人口問題を，たんに社会学的に説明すべき社会現象，ないしは他の社会現象を説明すべき要因としてみるだけでなく，そこから新しい社会理論を構築しようとする作業領域的な意味あいである．現在最も生産的な社会理論家のひとり Giddens の社会理論や，O'Neill，Turner らの身体論をみると，必ずしも顕在的・統一的理論として読みとれるわけではないが，人口問題がいわば隠し味的な役割で彼らの理論に活かされていることがわかる．それらは何より Foucault の影響が大きいと考えられるが，誤解を恐れず推察するならば，「権力」（特に近代以降）の特性を知るうえで，人口問題およびその社会的構成の歴史に関する研究は避けて通れないという認識が広まりつつあるように思われる．

本書は，人口問題のなかの出生問題に着目し，権力関係の変化が出生行動にいかなる影響を与えるかという観点から，広義の「政治学」（フォーマルな政治システムのなかで起こるような政治学ではなく，誰が，何を，いつ，どのようにして得るのかという Lasswell 的な意味の政治学）を，11人の人類学者や医師（大半が女性）が，様々な地域の具体的事例をもとに展開したものである．第1章で編者が理論的枠組みと全体の概要を提示し，第2章から第11章まで事例分析が続くという構成になっている．

さて，内容だが，理論的には率直に言ってそれほど新鮮味はない．編者はまず，Lasswell の政治学に依拠して resource access 理論なるものを打ち出しているが，それによると権力は，資源（ここでは人間の生命を維持するのに必要なエネルギーや栄養分，およびその獲得手段を指す）を求める人口と個人が資源へアクセスできるチャンネル数との関数でもって表現される．これは，Foucault や Luhmann の権力概念に慣れ親しんだ者からみると，あまりにも実体論的・合理主義的概念で，現実の分析にどれほど耐えうるか疑問と言わざるを得ない．しかしながら，出生現象を「近代化」や「産業化」といった，よく使われるが実質的にほとんど説明能力のないステレオタイプの概念に頼らずに，権力関係の変容という観点から一貫して説明しようとする志向性は評価される．

事例分析の方は，編者の理論的枠組みが必ずしも共有されているわけではないが，分析対象は多種多様で，随所に新しいデータと洞察を発見することができる．地域別にみると，アメリカについて4章，アフリカについて3章，ハンガリー，バングラデシュ，カナダについてそれぞれ1章ずつ割かれている．いずれも今日的問題を扱っているが，そのなかでも特に，女性は出産の問題から男性以上に手厚く保護されなければならないという主張がアメリカの産業界で広まっているが，それは女性排除のイデオロギー以外のなにものでもないという報告（第2章），人生の試練がもたらす苦痛や危険に対しては冷静なふるまいと忍耐で臨むのが美徳だとされる西アフリカ Benin の Bariba の女性にとって，家よりも安全で苦痛が少ないと政府が勧める近代的病院でのお産は，恥であり，より苦痛となるという報告（第4章），アフリカの女性のなかには AIDS の危険性を十分承知しながらコンドームの使用をためらうひとがいるが，それはコンドームの使用に様々な文化的メッセージ（例えば，相手との関係に終止符を打つ）が込められているからだ（第11章）といった報告などは，特に興味をそそられるものである．

方法論的にもなかなかユニークである．人口学につきものの図表や数式は1ページもなく，全編ひたすら記述に徹しているが，Lévi-Strauss や Goffman 流の視点が垣間みられる参与観察やインタヴュー調査，新聞記事等の分析がそれを支えており，生き生きとしたリアリティを読者に伝えてくれる．

人口の政策研究は多いが，人口の政治学，人口の権力論がまだ少ない現状だけに，このような研究が正当に認められ，進められることを期待したい．

（才津芳昭）